

EVOLTEC LYRYCAL

通りすがりの錬金術師

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球外生命体エボルトと戦った仮面ライダービルドたちの活躍。

これは仮面ライダーの存在しない世界で、それを夢に見る一人の少女の物語。

※この作品は作者の『エボルトの力を持って転生したので暗躍する』のリメイクとなります。

リメイクと言っていますが、原作キャラとの関係や設定等ほぼ別物となっております。

目次

プロローグ	1
1-1 運命の分岐点	7
1-2 Wake up Magic	15
garl!	22
1-3 ベストマッチな姉妹(十一)	30
1-4 車椅子少女とランナウエイ	37
1-5 高町香帆と魔法と説明	41
1-6 お茶会と金色の兵士(ソルジャー)	49
1-7 温・泉・休・息!	58
1-8 再会の金色の兵士	68
1-9 特訓と……?	77
1-10 禁断の引き金	87
1-11 宇宙戦艦ヤマト?……え、違う!?アースラ?	94
1-12 いざ!最後のジュエルシード回収へ!……え?最終決戦も終わった!?	106
1-13 やっぱりハザードは止まらない?	120
2-1 祝え!我がま……親友の誕生日を!そして……	

プロローグ

「お前が代表戦に出ないのは勝手だ。けどそうなった場合、誰が代わりに出ると思う？」

万丈だ。

万丈は今回の件でお前に負い目を感じてるはずだ。だからお前がやらなきゃ自分から手を挙げるだろう。けど、今のあいつじゃ 그리스 には勝てない。そうなれば、東都の連中は寄ってたかってクローズを責める。

お前が戦うしかないんだよ！お前にもわかっているはずだ。だから何かを期待してここに来たんだろう！」

~~~~~

『Cobra!』

「蒸血」

『Mist—Match……:Coo—Coo—Cobra……:Cobra……:Fire!』

【何をためらっている！お前には守るものがあるんじゃないのか!?自分が信じる正義の

為に戦うんじゃないのか!?それとも全部嘘だったのか!?

~~~~~

「俺の名前はエボルト。あらゆる惑星を吸収して自らのエネルギーに変える地球外生命体だ。この地球を滅ぼして俺の一部にする！」

……だが、10年も住み着いた惑星だ。愛着もたつぷりあるんでね。特別にチャンスをやろう。

仮面ライダー諸君に告ぐ！明朝、パンドラタワーの前にロストボトルを持参して集結せよ。この星を賭けて最後の戦いをしようじゃないか！ハハハハ！」

~~~~~

「この星に来て10年……色んなことがあったよなあ。お前たちに触れて、人間がいか  
に愛すべき、愚かな存在かよくわかったよ。」

でも、今日でお別れだ。お前たちが持つてるロストボトルを戴いて、俺は究極の力を  
手に入れる」

『Over The Evolution!』

「地球滅亡はすぐそこだ」

『Cobra! Rider System!』『Revolution!』

『Are You Ready?』

「変身」

『Black Hole! Black Hole! Black Hole!』『Revo  
lution!』『フツハツハツハ!』

~~~~~

「お前がすべての元凶なんだよ。お前がライダーシステムを創らなければ、仮面ライ
ダーにならないければ、こんな悲劇は生まれなかつたんだ!お前は、俺に作られた、偽り

のヒーローだったんだよ！」

~~~~~

「この俺が滅びるだど!?そんなことが、あつてたまるかあ!人間共があ!!」

夢を見た。その夢の中で私は男だった……多分、男だったと思う。そしてそこはとて  
も非常識な世界だった。日本がスカイウォールとかいう巨大な壁で東都、西都、北都の  
三つに別れていたり、現実には存在しないスマッシュとかいう怪物が暴れていたり、そ  
れを倒す仮面ライダーとかいうヒーローがいたり、私がファウストという組織で人体実  
験を行って人間からスマッシュを産み出していたり。一番は私が火星の文明を滅ぼし



た宇宙人で、地球も滅ぼそうとしているんだということ。これが本当に意味がわからない。

それになんてかはわからないけど、昔から何度もこんな夢を見る。まるで物語のような話。

これは夢じゃなくて誰かの記憶を見ているみたいだ、とは私の夢の内容を聞いた友人の談。

---

「……て。……きて！」

「むにや……せんとお〜」

「なのはだよ！起きてっば！」

「ふえ？……おはよう、なのは」

「うん、おはよう……じゃないよ！いつまで寝てるの!?もう学校行く時間だよ！」

「えっ？……やばい、遅刻するう!？」

姉のなのにはに叩き起こされた私はすぐに制服に着替えて、朝食を流し込むように食べ、家を出た。

これはそんなこんなで（？）送る私、高町香帆の日常の話。

## 1—1 運命の分岐点

とある日の昼休み。私は姉のなのはと親友のアリサとずかずかと一緒に、屋上で昼ご飯を食べていた。

そこで盛り上がった話題は将来の夢。今日の授業でそれについて担任の先生からの問があった。

「私はパパの会社を継ぐから経営の勉強しなきゃいけないわね」

「私は機械に興味あるから工学の勉強かな？」

「なのはと香帆はどうなのよ？」

アリサにそう聞かれた私は自信満々に答えた。

「もちろん、私は翠屋で働くよ！美味しいケーキやシュークリーム作って、コーヒー入れて……いつか翠屋を世界一の喫茶店にしてみせる！」

だけどそう言った瞬間、何故か周りの空気が凍りついた。何かおかしいこと言った？

「ま、待ちなさい!?!香帆」

「そうだよ、香帆ちゃん!考え直して!」

「う、うん!いくら香帆ちゃんでもそれはダメだよ!」

え、なんで!?!どうしてこんなに否定されるの!?

「いや……まあ、その……」

「確かに香帆ちゃんの作るお菓子は美味しいんだよ?」

だったらいいじゃん!?!皆して……

「でも香帆の入れるコーヒーは飲めたものじゃないわ。

というか!?!どうして皆で同じ入れ方をして香帆のだけあんな味になるのよ!」

「飲んだ時、三途の川が一瞬見えたよ……」

「コーヒーは専門の人雇うか、将来の旦那さんに期待するしかないかな?……まあ、それ

「以外は香帆ちゃんのスキルなら十分だからいいとは思うけど」  
「うう……それよりもなのはの夢は？」

心にグサツときたのでとりあえず話をそらす。

「え？私は……思い浮かばないかな」

「なのも翠屋じゃないの？」

「そうなんだけど、もっと他にも私に出来るんじゃないかなーって。

私には取り柄とかないし、香帆ちゃんみたいに運動得意じゃないし、出来ることあんまりないかもだし……」

「このっ、バツカモンがあー！」

ネガティブモードに入ったのはをアリサが何処からか取り出したハリセンで引つ叩いた。……ほんとにどこから出したの？

「あんたは理系の成績が私より良いでしょうが！どの口がそんなこと言ってるのよ！」

アリサに頬を引つ張られ、変な顔になっていゝのはを見てすずかと私はつい笑つてしまつた。

午後の授業を終えた私たちは徒歩で家へと帰る。  
四人で仲良く話をしながら歩いていゝと、

『助けて……』

「え？」

謎の音が聞こえたので足を止めて周囲を見回したが、私たち以外に誰もいない。なのはにも聞こえたのか、同じく周囲を見回していた。アリサとすずかはそんな私たち二人を不信に思つたのか首を傾げている。

気のせいか、と思ひ再び歩き出そうとするとまた聞こえた。

『誰か、助けて……』

やっぱり気のせいじゃない！そう思った私は走り出した。なののも同じタイミングで走り出している。

「ちよ、ちよつと!?!待ちなさい！」

私の直感に従って向かった場所には壊れたボートが散乱していた。そこで声の主を探したがどこにもいない。代わりになのはが傷だらけのフェレットらしき生き物を発見した。……まさかこのフェレットが助けを？いや、ないない。

一先ずこのフェレットを近くの動物病院に預け、誰が引き取るか相談した。

最終的に私たちの家で引き取ることに。アリサは犬、すずかは猫を飼っていて難しいから、だそう。

家族の了承ももらったから明日引き取りに行く予定だったんだけど……

「うひゃあああああ!?!」

「なんなの、あれー!?!」

時間は夜。私となのはは今、謎の怪物に追われている。そしてなのは手の中には件のフェレットが。

なんでこんなことになってるかというど、

『誰か……ボクの声が聞こえる方……お願いです……力を貸してください……』

つて声が家にいるとき聞こえて、昼間と同じくなのはにも聞こえたみたいで一緒に家を飛び出していった。

急いで動物病院に向かうと、外に気を失ったフェレットが倒れていて拾ったはいいものの、そこに謎の怪物が現れて私たちに襲い掛かって来た。

「とにかく逃げよう、なのは！」

「う、うん！」

そして今に至る。

怪物は道路等を破壊しながら私たちを追ってきている。普通なら気づいた人の通報で警察や自衛隊が来るとは思うんだけど、何故か私たち以外に人が一人もいない。誰か



に連絡しようにも携帯は家に置いてきていて、何も出来ない。

今は物陰に隠れているけど、このまま見つかって美味しく(?)頂かれちゃうのかな?なんて思ったその時、

「う、うーん……ここは?」

「え?……動物が喋った!」

「え、いや、僕は……ってそれどころじゃないか。巻き込んだりやっつてごめんなさい。悪いけど力を貸してもらえませんか?」

「それってあの怪物をどうにか出来るわけ?」

「はい、もちろんです!これを!」

いきなり喋り出したフレットがなのはにビー玉みたいな小さな赤い玉を渡した。

「それを手に、僕の後が続いて繰り返して!

風は空に、星は天に」

「風は空に……星は天に……」

「不屈の心はこの胸に」

「不屈の心はこの胸に」

「この手に魔法を！」

レイジングハート、セーフトアープ！」

その言葉と共になのはが光だした。

ほんとにいったい何が起きてるの!? 全然話が読めないんだけど!?

## 1—2 Wake up Magic girl!

なのはを包み込んだ光が収まると、そこには小学校の制服……によく似た服を着て、手には機械の杖を持ったなのはがいた。

「え、ええええええ!?」

「凄い魔力だ……これなら!」

その後、フェレット——本名をユーノ・スクライアというらしい——とレイジングハートという魔法の杖に色々と教えられたなのはがピンクの砲撃で怪物を撃退、封印することで一旦終息した。

だけど、この光が目立ったのかパトカー等のサイレンが聞こえたので、急いで家に帰った。見付かったら補導されちゃうしね。

「と、いうわけでボクはジュエルシードを回収しているんです」

そして今、お父さんとお兄ちゃんに夜に外に出たことがバレて軽く怒られた後、部屋で私、なのは、ユーノの三人（二人と一匹？）でユーノの話聞いていた。

ユーノは古代遺産……ろすところぎあ？なるものの発掘の仕事をしていて、そこで見つけたジュエルシードっていう21個ある宝石が輸送している途中の事故で地球にばらまかれたらしい。発掘者としての責任としてそれを回収していたんだけど、一つ回収したところで限界が来て助けを求めて今に至ると。レイジングハートもその時に見つけたデバイス——魔法の発動補助機械みたい——らしい。で、ジュエルシードは膨大な魔力が内包されている魔力結晶体で『願いを叶える』という力を持っているそう。ただ、まともな叶え方はしないみたいだけど。

「今日はありがとうございました。お礼にレイジングハートは差し上げますので。ボクはこれで……」

「待つて！私も手伝うよ！」

「え？」

「なのは？」

「だってほっとけないもん！ユーノ君が困ってるなら助けたいんだから！」

「いや、でも……」

ユーノが何か言ってくれとばかりにこちらをチラチラ見てくる。けどね？なのはそのうなると止められないから、ごめんね？

押しきられたユーノは渋々承諾。話はこれで終わりで寝ようかとユーノは言ったが、

「あ、ねえ。私も魔法使って見たいんだけど出来る？」

「え？……あ、うん。なのはほど魔力があるわけじゃないけどデバイスがあれば出来ると思うよ。でも予備のデバイスは持ってないし……あ、もしかしたら。レイジングハート、あれ出して」

『了解です』

ユーノが申し訳なさそうに言うが、何かを思いだしレイジングハートに頼む。そして出てきたのは……石で出来た手乗りサイズの四角い小さな箱。……ただ、どこかで見たことある模様が描かれている。

「ユーノ、これは？」

「これはジュエルシードと一緒に置かれていた物だね。台座に置かれていたからたぶん中身はロストロギアかデバイスじゃないかな? って。問題は開かないことなんだけど」

開かないなら意味ないじゃない!? と、魔法を使えないことに沈んでいると、不意になのはがそれを手に取った。

すると、箱が光り出した。

「え? え?」

「嘘……もしかして開くのか?」

しかし、開くかと思われたそれは徐々に光が弱まっていき、特に何も起きなかった。これを見たユーノは何を思ったのか、私にも持ってみてくれと頼んできた。

「これは……」

「凄……」

とりあえず言われた通り持ってみた。すると、どうだか。私が持った箱を瞬間、先ほ

ど以上に光り出し、模様がハッキリすると共に箱が展開されていた。

中からは全体が赤く、蛇みtainな顔のパーツがついたボトルが出てきて、石の箱は一枚の黒いパネルに変形した。

ここで私は思い出した。石の箱に感じた既視感の正体を。

ボトルの方はコブラエボルボトル、パネルの方はパンドラパネル。いずれも私の夢に出てきた物だ。

でもなんで？あれは、夢じゃないの？

「……ほ………ん。か……ちや……。香帆ちゃん！」

「ふえ？」

「えーと、聞いてた？」

「ごめんなさい、聞いてなかったです。正直にそう言うと、改めてユーノは話してくれました。」

「そのボトルはデバイスみたいだね。パネルの方は……ロストログアかな？」

「とりあえずそのデバイスはあげるよ。ただ、少しでも調べられるように借りるかも知れない」

けど」

私のデバイス……名前は、うん、わかる。理由は知らない。とりあえず起動してみる。

『ブラッド』、セットアップ！』

バリアジャケットなる防護服が展開。見た目はほぼなのはのバリアジャケットと同じ。違いは、なのはののでは白い所が赤くなっていて、ロングスカートじゃなくミニスカートになっているところ。手にはこれまたやはり夢で見た『トランスチームガン（ラifulモード）』が。分離出来るのかやってみたら、無事『トランスチームガン』と『スチームブレード』に分かれた。

「香帆のデバイスは近く中距離対応型みたいだね。なのはが遠距離型だから、バランスはいいかな。一応ボクは防御魔法は得意だし」

こうして私たち二人はユーノの手伝いをすることに。

危険もあるかも知れないけど、三人ならなんとかなる！……はず！



明日からジュエルシードの回収だね。頑張るぞ、おー！

## 1—3 ベストマッチな姉妹 (+1)

私たちが魔導師デビューした翌日。

朝、通学のバス内で会ったアリサとすずかにフェレットことユーノを飼うことに決まったと伝えると二人とも安心した表情を浮かべた。今度家に連れてきて撫でさせてとは言われたけど。

もちろん、了承しておいた。ユーノは魔法が使えて話せるとても珍しいフェレットだから、バレたら面倒な事になるけど、会わせないと逆に何か隠してると思われるかもしれないからね。

その日の授業では、何度かなのはがブーツとしていてその度に先生に怒られていた。休み時間にアリサとすずかに軽く叱咤されていたけど、ちよつと仕方ないかな？ っと思つた。

そのブーツとしていた理由がマルチタスクの練習をしていたから。私たちは魔法を使うのに便利なマルチタスクをユーノ指導で練習していた……授業中に。マルチタスクは一つの事をやりながら、別の事を同時に行うという高度な技術。つまり、私たちは学校の授業を聞きながら、ユーノと念話で話をしていた。その念話になのはが集中し過

ぎた結果、ボーツとしてるように見えたみたい。

何故か私は最初から出来てユーノとなのはに驚かれた。授業で当てられて答えた内容がそのままリアルタイムで念話に流れることもあったけど、ユーノからは合格点を貰えた。

そして放課後。一度家に帰り、ユーノを連れてなのはと一緒に街を周りジュエルシード探索を開始した……のはいいんだけど。

「見つからないね……」

「うん……」

「仕方ないよ！まだ初日だし、そういう事もあるって！」

たぶん、今の私となのはの気持ちは同じだと思う。そう、魔法を使いたいツ！無闇矢鱈に使えないから使える時に使いたいって思うのは、普通だよな？

そんな事を思っていると、ユーノとレイジングハートが何かを感じたらしい。聞くど、ジュエルシードが発動したらしく、私たちの出番が来たようだ。

発動場所は神社。私たちが辿り着くと、ここでは黒い四足歩行の大きな獣型の暴走体が暴れていた。近くにはその暴走体にやられたのか、怪我をした女性が一人倒れている。

「なのは！香帆！あれは原生生物を取り込んでいるみたい！この前のより強いから気をつけて！」

ユーノの言葉を聞きながら『ブラッド』をセットアップし、女性を助ける為に駆け出す。なのはは何故かセットアップに手間取っている。何を？と思つて後になつて聞いたら、ユーノに一般的な初心者には普通は起動パワードが必要なんだ、と教えられた。それ、私が一般的じゃないって言つてるようなものだよね!?

なのはが手間取つてる間に私は左手に拳トランスチームガン銃へと分離させた『ブラッド』を持ち、暴走体に向けて撃つ。分離させたもう片方の小スチールレイド剣の方は右腰にセット出来たのでそこに差しておく。

攻撃されたことに気付いた暴走体は下手人である私を獲物と見たのか、まんまとこちらへと誘われてくれた。さっそく会得したマルチタスクを使い、暴走体の攻撃を避けつつユーノへと女性を助けるよう念話を送る。

そこに私と同じくパスワード省略でのセットアップに成功したなのにも合流し、暴走体を攻め立てる。私が拳銃と小剣を用いて翻弄して、動きが遅くなった所をなののが昨日と同じ桃色の砲撃で大ダメージを与える。

何度かこのパターンが続き、もうすぐ倒れるかな？と思いはじめた頃、突然暴走体が大声をあげ、思わず耳をふさいで動きを止めてしまう。そして暴走体はチマチマとしか攻撃しない私より、デカイ一撃を与えてくるなのを脅威と見なしたのかそちらへと飛びかかる。

「なのはッ!」

「ひっ!」

『Protection』

暴走体の爪の一撃がなのはを引き裂くと思ったその時、レイジングハートが声を発しシールド……じゃない、防御魔法を展開した。それに守られたお陰でなのはは無傷だったが、暴走体はその盾を蹴り、その勢いで今度はこちらへと飛びかかってきた。

レイジングハートが反応して防御魔法を展開してくれたお陰で助かった。暴走体はその防御魔法を蹴って後ろに下がった。……って違う!? 香帆ちゃんに向かって飛びかかっている!? まさか、盾を足場にしたの!? 私の後ろにいたユーノ君も驚いてまだ固まっているままの香帆ちゃんに声をかける。

「香帆、危ない!」

「香帆ちゃん! 避けて!」

だけど香帆ちゃんは動くことなく、暴走体の爪が振り下ろされた。腕が地面まで叩きつけられた衝撃で土煙が出て香帆ちゃんたちは見えなくなった。だけど香帆ちゃんはもう……。

「なのは! 僕は回復魔法が少しなら使える! それに香帆はバリアジャケットを纏っているんだ。流石に死にはしないから!」

ユーノ君にそう言われてハツとした。そうだ、香帆ちゃんは死んだと決まったわけじゃない。早く助けに行かないと！そう思つて香帆ちゃんと暴走体の方に近づくと、

『エレキスチーム！』

そんな音と一緒に暴走体が土煙の中から跳ね上げられた。それで土煙が晴れたので香帆ちゃんを見ると傷一つない状態で立っていた。何があつたのか聞こうとしたけど、香帆ちゃんに『早く封印を！』つて言われたから先にそうすることに。

「リリカルマジカル！ジュエルシード封印！」

これでなんとか無事に終わったから早速香帆ちゃんに聞きたいことを聞ける。そして驚きの答えが返ってきた。

「香帆ちゃん！大丈夫なの!？」

「香帆！怪我はしてない!？」

ジュエルシードの封印が終わって早々。なのはとユーノに詰め寄られた。怪我してないって言うのと、二人して言ったのは「なんで無傷なの!？」って。その理由を説明したらものすごい驚かれた。うん、わかるよ。私も自分で驚いているから。

暴走体がこちらに突っ込んできた時、何故か私にはそれがものすごいスローに見えた。さらにどこに爪が振り下ろされるか、どこまで攻撃が届くか、どこなら安全かもわかった。わかった理由は不明。そもそも最初に暴走体を翻弄している時も勝手に体が動いていて、(どうやれば上手く気を引けて、自分は怪我しないように動けるかわからなかったの)結果上手くいつている。まあ、とにかくそうやって攻撃を避けた後、懐に入り込んで『エレキスチーム』を纏わせた小剣で暴走体をかち上げ、なのはが封印したというわけ。

初めての戦いだけど、なのはとの息も合ってたと思うし良かったんじゃないかな？巻き込まれて怪我した女性はユーノが眠らせた後に治療したから夢だと思ってるだろう



し、特に問題はなかったかな？

## 1—4 車椅子少女とランナウェイ

神社での戦いから数日。なのはとアリサとさすががユーノを連れて、お父さんが監督を務めるサッカーチームの応援に行っている頃、私は友達と遊ぶ為に、待ち合わせ場所の図書館に向かっていた。

「お、香帆ちゃん！こっちや、こっち」

「あ、はやて！」

図書館前に着くなり私を呼んだのが友人のはやて。足が悪く、車椅子での生活を余儀なくされている少女だ。

私と彼女の出会いはいは偶然。ちよつと前：ユーノと出会い魔法を手にする数ヶ月前に図書館で知り合った。車椅子に乗ったまま、高い所にある本を取ろうとしていたのを見て、手を貸したのがきっかけだった。

「さあ、香帆ちゃん！例の物は？」

「こちらになります、はやて様」

「おお！これかいな！」

ふふふ、主も悪よのお？」

「いえいえ、はやて様には及びませんよ……ふふつ」

なんて笑いながらふざけて言いあつてるけど、例の物とはただのノートの事である。中身は私の『夢』の内容を物語風にして書いてある（一部挿し絵付き）。タイトルは『K A M E N R I D E R B U I L D』。特にいい名前が浮かばなかったから、一番主人公っぽかった『桐生戦兎』こと『仮面ライダービルド』を主人公兼タイトルネームにして『夢』の内容を再構成してある。ただ、『夢』の中の『私』視点ではわからないこともいくらかあったので、そこは話がおかしくならない程度に補完している。以前、『夢』の内容を少し話した時にもつと聞きたいと言われたから、今度ノートに纏めてくると言うて作ったのがこれだ。

少し読んだ感想を聞くと、「ベストマッチってなんや!?!なんでウサギと戦車がベストマッチやねん、どういう関係!?!」等、まあ色々突っ込まれた。私に言われても……つて思ってたけど、元ネタは私の夢だったね。映像化出来たら面白いんだろうなー、とか思ってた……あ、魔法で無理なのかな？こんどユーノに聞いてみよう。

そんなこんなで私の『夢』の話や、世間話をしていると、帰る時間になったので途中でまで一緒に帰ることに。

「いやー、中々読みごたえあるなあ。これ、何ページくらいあるん？」

「え？そのノートが……現時点で3冊分くらい？」

「多っ!?!うわっ、ほんまや。最後のページまで書いてるやん……」

はやてが半日で読めたのは、わりかし最初の方だけ。具体的に言うと『戦兎』が『コブラ怪人』<sup>ブラッドスターク</sup>に変身した『私』と出会った所まで。

そして、そろそろ別れる所に差し掛かった時、強力な魔力の気配を察知した。

「!?!なんや、今の……っつてわあっ!?!」

なぜかそれははやても感知したみたいで少し驚いてたみたいだけど、突然地面が激しく揺れだしてそれどころじゃなくなった。はやての車椅子の持ち手部分にしがみついて倒れないようにするのでいっぱいになったから。

『香帆！聞こえる!?』

『ユーノ！ねえ、これって……』

『うん、ジユエルシードだ。僕たちも今向かってるんだけどこれる?』

『ごめん、今魔法を知らない友達と一緒にいて無理そう!』

『そう、わかった。じゃあ香帆はその子連れて避難してて。ボクとなのはでやるから』

『お願いね!』

ユーノから念話が飛んできて軽く現状を説明してもらって、だいたい理解した。

「香帆ちゃん、大丈夫か?」

「はやてもね……ってあれは」

揺れが収まり周囲を見ると、巨大な樹が現れてその根が街中に広がっているのが見える。

「……香帆ちゃんの話にあった、パンドラボックスがスカイウオールを作って日本三分割、みたいな事が起きてんのかな?」

「いやいや、あれは夢の話だから！これが起きてるのは現実だけど……」

「わかつとるつて。さて、避難しよか……ほんまは近くに行つて見てみたいけど」

はやてが冗談でそんなことを言った時、はやての真下から大樹の根が突き出てきて、はやてが上空に投げ出された。

「えっ」

「はやてッ！」

このまま落ちるとまず間違はなく怪我するし、先ほど根が出てきた時に車椅子が巻き込まれて壊れているので、早く封印が終わらないと動けないので最悪死ぬ可能性もある。魔法を隠すことを優先して友達が怪我するくらいなら、バレても構わない！ユーノには悪いけどね。

『ブラッドアクション』

『ブラッド』を起動し、レイジングハートの協力を受けて『ブラッド』内部で見つけた

魔法を使用。伸びてきた根を避けつつ、はやての所へと高速で移動し空中で受け止める。はやては怖かったのか、目を強く閉じて固まっている。

「大丈夫だよ、はやて」

「へ？……香帆ちゃん？」

「さあ、行くよ。しつかり掴まってね！」

「え、いや何処に？つてかその服装は？……ん？ちよい待ち、香帆ちゃん飛んでるやん！？」

はやてが色々とうるさいけどそれは置いておく。私ははやてを抱えたまま……は少しキツイから背負い直して、大樹の中心から離れるように移動を開始した。

意思を持つてるのか、魔力に反応してるのか、根が私に向かつてきたので、それを避ける。たまに避けきれないのが来るので、それは拳トランスチームガン銃で撃つて吹き飛ばす。はやてを背負っているから『ブラッドアクション』は使わない方が良さそう。速すぎて間違いなくはやてが■ヒ■から。

そんなこんなで10数分の間逃げ回っていると、遠くから桃色の閃光が大樹に命中し、次の瞬間には大樹は消え失せた。たぶん、なのはがやってくれたのかな。

これならもう大丈夫だと、地面に降り立ち『ブラッド』を解除する。ただ、はやての車椅子が無いので家まで送ることに。

「いやあ、悪いなあ香帆ちゃん」

「別にいいって。あれは仕方ないよ」

「さよか。なら……」

「?……!?!」

言葉を一旦切ったはやてはいきなり私の胸を揉んできた。驚きではやてを背中から落とさなかつた私は誰かに褒められてもいいと思う。

「とりあえずさっきの事、説明してもらおか。じゃないと今日は話すまでこのまま揉み続けるで!」

友人の思わぬ性癖?を知って少し引いた私だった。



## 1—5 高町香帆と魔法と説明

はやての家からお母さんに電話して、泊まる許可は貰えた。残る問題は、はやてへの説明。

とりあえずどう説明したものかな……まあ、面白おかしく話せばなんとかなるでしょ  
(投げやり)

「……つてわけなんだけど」

「ほーほー。つまり、不思議な声が聞こえた思うたら、フェレットとそれを襲う怪物がおつて？そのフェレットが喋り出したあげく、香帆ちゃんのお姉さんののはちゃんが魔法少女になって、怪物を倒した。香帆ちゃんも自称異世界人のフェレット……ユーノ君からデバイスを貰つて魔法少女に。つてわけか」

「そういうこと。あと、ジュエルシードも忘れないでね。危険だから見つけたらすぐ連絡するんだよー」

「オツケー、オツケー。見つけたら私の足が動くように願えばええんやな？」

「そうそう、それで万事解決……つて違うよ!?ほんとに危険だからね!」

まあ、冗談だとは思うけど……。そう思っていると、はやてが何かを持ってきた。これは、箱？それを私の前で開けると、なんと中にはジュエルシードが入っていた。

「じゃあ、これは香帆ちゃんに渡せばええんやな。この前、家の庭に落ちとつて綺麗やら拾つて箱にしまつといたんや。いやー、知らんうちに街を守つてたんやな、私」  
「あー、うん。そうだねー」

つい、棒読みで返事した私は悪くない……。はず。だつて話した直後にジュエルシードが出てくるなんて思えるはずないでしょ!?

それで、封印しないといけないんだけど残念なことに私は封印魔法を使えないから、仕方なくデバイスの収納空間にしまっておく事に。

だけど、その前にジュエルシードを手を取つてよく見たことがないから、見てみようと思つて手に取つた。

すると、いつかの様に激しく光り出した。

「え、ちよい香帆ちゃん？何か願つたん？」

「ううん、何も……ただ持っただけなんだけど」

「でも光つとるやんか!？」

家が壊れるううう!!!つて悲鳴をあげてるはやてを横目に、私はそんなことにはならな  
いだろうと何故か理解していた。

そして光が収まると、手の中にあつたのは一本の銀色の蛇が描かれたボトル。間違い  
なくコブラフルボトルだ。

「ねえ、はやて」

「嫌や……聞きたない……家の被害なんて聞きたない……」

「いや、大丈夫だから顔上げて?」

「へ?……ほんまや、良かったあ……」

「とりあえず今日の事は秘密ね!」

「了解や。……ところでさっきの光はなんやったんや?」

はやてが聞いてきたのでニッコリと笑ってこう返しておいた。

「はやて。世の中には知らない方がいいことがあるんだよ?」

「お、おう……わかった、わかった。聞かんといたるからその顔は堪忍して!」

その日はそれで終わり、翌朝何事もなかったかのように私たちは別れた。

家に帰っても、ユーノとなのはにはジュエルシードが変化したことは黙っておいた。今後ジュエルシードに触れないようにしようとしてそり決めたことも。

## 1—6 お茶会と金色の兵士（ソルジャー）

今日はすずかの家にいつもの四人で集まってお茶会をしている。

以前の約束通り、ユーノも連れてきている。最初は我慢して二人にモフモフされていたけど、途中から耐えられなくなったのか、抜け出していった。

だけど、すずかの家は猫屋敷と言っていいほどの多くの猫がいる。抜け出したユーノはすぐに猫に捕まって弄られていた。

すずかの出してくれたお茶を飲んで、お菓子を食べながら話していると、ジュエルシードが発動したのか魔力の気配を感じた。

『なのは！香帆！ジュエルシードだ！』

『ええっ!?ど、どうしよう……。アリサちゃんとすずかちゃんがいるから……。』

『私がいばらく時間稼ぐから封印できるのはとユーノが先に行つて！私は後から行くから』

『う、うん！頼んだよ！香帆』

念話での簡単な作戦会議を終えて、まずはユーノがここから外へと逃げ出す形でジユエルシードの所へ向かう。

「あ、ユーノくん！勝手に出ていつちやダメだよ〜！待って〜」

「なのは！私たちも……」

「アリサ、さつきユーノを思いつきりモフモフして逃げられたじゃない。だから追っても逆効果になるんじゃないかな？なのはに任せようよ」

「それは……確かにそうね。でも、なのはって運動音痴じゃない。時間かかるんじゃないかしら？」

……否定したい。したいけど、なのはが運動音痴なのは双子の妹の私がよくわかってる事だから出来ない。なんで双子なのに得意不得意がこんなにわかるのかな？

「……さ、流石に時間かかるようだったら私が捕まえにくから」

「まあ、いいわ。」

あ、そうだ。………」

ふう。なんとか、誤魔化せたかな？

15分くらい待ったけど、一向になのはが戻ってくる気配がしない。アリスもちよつとイライラを隠せなくなってきた。

「遅いわね」

「なのはちゃん遅いね」

「じゃ、じゃあそろそろ私も探しに行ってくるね。少し心配だし……」

そう言っつて私もなのはたちの向かった所へ急ぐ。もしかして今回の暴走体が強くて苦戦しているのかもしれない。ユーノもいるから最悪の事態にはならないと思うけど……。ちよつとゆつくりし過ぎたかな？

なんとなく感じるなのは魔力の気配を追ってすずかの家の敷地内の森に入っている。……家の敷地内に森があるって、ほんとこういう所でお金持ちって感じしてるねえ。

ドンパチしてる音が聞こえて来たから、やっぱり予想は正しかったんだ。そう思っただけに近づく。

空を舞うなのはのバリアジャケットが見え、声をかけようとしたその時。

なのはと戦っている相手がジュエルシードの暴走体じゃなくて、同じくらいの年齢の金髪の女の子で、その手に持つ斧（たぶんデバイス）の攻撃でなのはが落とされそうになるのを見て、私の中の何か割れた音がした気がして……そこからの事は覚えていない。次に目が覚めたらなのはとユーノに介抱されていた。

この時の事はなのはもユーノもとにかく凄かった、みたいな事しか言ってくれなくてよくわからない。



まさか、ボクたちの他にもジュエルシードを狙っている人がいるなんて……。

なのはと香帆が友達の家でお茶会をしている時に発生したジュエルシードの暴走。

ボクが脱走した振りをしてなのはに追いかけてもらって駆けつけた。封印魔法が使えない香帆は本人の言ったこともあつて、友達の足止めをもらっている。

そしてジュエルシードの発動地点に辿り着くと、そこにいたのはとても大きくなった猫。珍しくジュエルシードがきちんと願いを叶えた(?)みたい。たぶん『大きくなりたい』とでもこの猫が願ったのかな？

とにかく暴れるみたいな事はなさそうだし、なのはに封印して貰わないと。

「なのは、早く封印を……なのは？」

「だ、ダメだよ！可愛くて向けられないよ〜」

いや、そんなこと言ってる場合じゃ。そう言おうとした時。

どこから飛んできた魔力弾が巨大猫を襲い、ジュエルシードを封印した。

そして現れたのは一匹の狼と金色の髪に黒いバリアジャケットを纏ったなのはや香

帆くらしいの女の子。

彼女らはジュエルシードを回収して……って待って！

「それをどうするつもりだ！ジュエルシードは危険な物なんだ、返して！」

「そうだよ！それはユーノ君の……」

「ファイヤ」

ジュエルシードはボクが責任を持って回収しなければいけない物。だから声をかけるけど、あつちは聞く耳を持たず攻撃してきた。それは威嚇射撃だったのか、ボクたちの目の前の地面に当たった。

そこからなし崩し的になのはと金の少女との戦闘が始まった。ボクも援護したいけど、少女と一緒にいた狼が邪魔してきて手を出せない。

なのはは必死に話を聞こうとしながら戦うけど、相手は戦い慣れてるみたいで全然歯が立たない。

超スピードでなのはの後ろに回った少女がデバイスを振り下ろそうとしたその時。突如、赤い波動のようなものが少女を吹き飛ばした。

発生源と思われる方向を見ると、香帆が立っていた。だけど、どこか様子がおかしい。

なのはによく似ている双子の妹の香帆。でも今は全くの別人に見える。瞳が血のように赤く光っていて、感情が消えているような無表情、それに今の謎の波動。魔法陣が出てないことからあれは魔法じゃない。彼女は何者なんだ!?

ボクの邪魔をしていた狼もあの少女と合流。片手に小剣だけを持った香帆と少女 & a m p ; 狼の戦闘が始まった。

その戦いは圧倒的だった。明らかに戦い慣れてるあちらが手も足も出なかった、魔法を使い始めたばかりの香帆に。

あちらの二人のコンビネーションは流石と言えるものだった。だけど、香帆はそんなの知ったものかと高速移動で次々と避けていき、蹴ったり小剣で斬りつけたりしていく。

少女も高速移動ソニックムーブで香帆を追い越そうとする。それでも香帆の方が早く、一方的に勝られていた。そういえば香帆の高速移動ブラッドアクションって5秒しか続けて使えないはずじゃ? 戦闘始まってからずっと使ってる気がするんだけど……。

ポロポロになってきている少女を見た狼は、彼女を啜えて後退。そこで転移魔法を使い逃げていった。

相手のいなくなった香帆は次にこちらを見た。それはまるで獲物を捕食しようとする

る血濡れの蛇のような姿を幻視させられた。

そして一歩踏み出した香帆はそのままこちらに来る事なくその場で倒れ伏した。

ボクとなのはは急いで香帆の元に行き、様子を確認する。どうやら気絶しているだけのようだ。

ジュエルシードを回収したあと、香帆が目覚めるまで休む事に。香帆が起きて話を聞こうと思ったけど、香帆は何も覚えていないみたいだから何も聞けなかった。

なのはは純粹に、香帆ちゃん凄いつてばかり言っていたけど。

まあ、味方なら強いってのはかなり心強いからいいんだけどね。

## 1—7 温・泉・休・息！

氣持ち悪い  
夢を見た。

『私』がどこかの星を破壊していた。それも一つだけに留まらず何個も。

【ブラックホール！ブラックホール！ブラックホール！】

氣持ち悪い  
夢を見た。

『私』が逃げ惑う無抵抗の人々を攻撃していた。齒向かってくる人々も。

【レポリューション!!】

氣持ち悪い  
夢を見た

『私』はそれを見て高笑いしていた。星の滅び行く様を、満足そうに。

【フハハハハ!!!】

なのは金色の少女に負けたらしい日から数日。私は毎夜気分が悪くなる夢を見ていた。お陰で体調を崩してしばらく学校を休むことに。

ジュエルシードの回収もなのはとユーノに任せている。話を聞く限り、特に進展はないみたいだけど。

夢見が悪くて一向に体調が良くならず休みが続いたある日、私とすずかとアリサの家族で温泉旅行に行くことに。

毎年この時期恒例の家族旅行。私が体調崩したから今年は無しかなって思ったけど、温泉でゆっくり温まって休養すれば私の体調も良くなるかも、ということですずかとアリサやなのはが大人組に提案した結果、三家合同での旅行が企画されたらしい。

しんどかったら別の日に回すから無理しなくていい、とは言われたけど家で寝てばっかは流石にダメだし、ちょうどいいかな？

「ハア……ゲホッゲホッ」

「香帆、大丈夫？ やっぱ無理してるんじゃない……」

「だ、大丈夫だよ……たぶん」

とか、思ってたけどやっぱりまだ気分悪い……。しかもこの状態で車に乗ってるからより……。ウツ。

(※しばらくお待ち下さい)

ゲホツゲホツ……。失礼しました。

「ほ、ほんとに大丈夫!? 香帆ちゃん無理しちやダメだよ!？」  
「う、うん……。大じよ……。ウツプ」

(※今一度しばらくお待ち下さい)

ハアハア……さすがに大丈夫だと返事しようとしたときにまたやつちやった。

「やつぱり止めといた方が良かったんじゃ……」

「キュー……」

『うん……』

そんな!? せっかくの温泉なのになのはもユーノもそんなこと言わないで!!

あ、今はさすがの家の出してくれた車に乗っています。運転しているのはさすがの家のメイドの一人、ノエルさん。そして後ろに小学生組とユーノとさすがの家のもう一人のメイド、ファリンさん。

ファリンさんはさつきから私が○<sup>ピ</sup>度にエチケツト袋を渡してくれてる。

こんなはずじゃなかったのに……。

それからは寝ることが出来たから、特に何もなく旅館に辿り着いた。

旅館に着くと、私は車を停めたノエルさんに背負われて、まずは部屋に連れていってもらった。

そこですずかの姉でお兄ちゃんの恋人の忍さんから『お手製万能風邪薬』なるものを



渡された。風邪じゃないんだけどね……。

私の記憶だと忍さんって機械系の人で、しかも薬って免許かなんかないと作ったらダメなんじゃ……。ちよつと怪しいけど、目の前で『早く飲んで』って催促するみたいな目をして見つめられると飲むしかないよね。

一緒に渡された水と一緒にゴクン、と飲み込む。

気がついたら夜ご飯前だった。

おかしい……確かここに着いたの昼過ぎだった気がするんだけど。ここまで考えて気がついた。体が楽になつてることに。

いや、まだしんどい事はしんどいんだけど、物凄く楽になつてる。あの(怪しげな)薬のお陰?もしかしたら寝てる時に夢を見なかったのもあるかもしれない。

寝て汗をかいたから、ご飯の前に温泉に入りに行く事に。私は一応病人だから万が一に備えてノエルさんがついてきてくれる。(どうやら寝てる間もずっといたらしい)

「あゝ、あゝ……極楽極楽」

「香帆お嬢様、発言がどこぞのオヤジですよ」

うつ……。今のは確かにそうだけど、ピチピチの女の子にそれって酷くない!?

ノエルさんにそんな文句を言いながらペチペチ叩いていると、扉がガラガラと音を立  
てて開いた。誰か入って来たと思いつつ見ると、なのは、アリサ、すずか、美由紀お姉  
ちゃん、忍さん e t c . . . と、一緒に来たメンバーだった。

壁を隔てた隣の男湯からはお兄ちゃんやお父さんたちの声が聞こえて来てるから、み  
んな入りに来たのだろう。

「あ! 香帆ちゃん! もう大丈夫なの?」

「一応だけどね。結構楽になったよ」

「良かった……」

楽になったのは忍さんの(怪しげな)薬のお陰かもしれないって言うのは黙っていた  
方がいいよね?

温泉から出ると、小学生組（＋ユーノ）以外はどこかへ行つたから、四人で貰つたお小遣いで飲み物を買つて飲むことに。

「やつぱり風呂上がりと言つたらコーヒー牛乳でしょ」

「私はフルーツ牛乳かな。なのはちゃんと香帆ちゃんは？」

「私は……イチゴミルクにするよ」

うーん、何にしようかな……。

普通の牛乳……でもイチゴミルクもいいし、コーヒー牛乳も捨てがたいし。あえてC  
○レ○ンとかでもいいかも……。

「その子達。ちよつといいかい？」

そんなことで悩んでいると、お兄ちゃんやお姉ちゃんくらいの背丈でおっぱいの大きな女の人が話しかけて来た。

ただ、私を見ると少しビクツとしたのはなんでだろう？

そしてその人はなのはと私の顔をまじまじと見つめるだけで何も話さない。

「ちよつと! なんなのよ、あんた!」

呼び止めという何も話さない女の人に対してアリサがキレた。それに女の方は正気に戻ったのか、話し出す。

「あ、ああ、ごめんごめん。知り合いに凄い似てたもんでねえ。ついまじまじと見つめちゃったのさ。人違いのようで悪かったね」

それだけ言って立ち去った。

「なんなのよ、あの人……って、なのは? 香帆? どうかした?」

アリサが呼び掛けてくるけど、私たちは固まったままだった。

『今回はただの挨拶だけど……あんまり調子に乗っているとガブツといくよ?』

それと赤い魔導師。今度は負けないからね』

さっきの人がそう去り際に念話で伝えてきたことに驚いたから……。あと私、あの人と今初めて会ったんだけど、人違いじゃ？

## 1—8 再会の金色の兵士

夜。まだ体調が万全じゃなかったから、なのはたちより先に私は寝た。

夢は見なかった。あんな気持ち悪い夢はお断りだから、良かった。

でも、代わり……なのかな？

「……………なの？」

いきなり目覚めて、なんか行かなきゃいけないって思った。

まだ頭がスッキリしていないけど、布団を抜け出してそのまま旅館から出ていく。

……この時の私は半ば寝ぼけていたんだと思う。だって靴を履かずに裸足のまま外に飛び出したから。

ブラッドをずつと持っていた事が幸いして、バリアジャケットを展開することで足をケガすることはなかった。

夜になってジュエルシードの反応があったからユーノ君と二人で回収しに行くことに。

体調崩してる香帆ちゃんに無理させる訳にはいかないからね！

そう意気込んで走っていったのはいいけど、着いた時にはもう終わってた。

この前、すずかちゃんの家の時にも見た金の魔法少女が封印した所だった。

「懲りずに着たのかい、お嬢ちゃんたち」

木の上からそう声が聞こえたから見ると、そこには旅館で見た女の人が。ケモミミ生やしているけどコスプレなのかな？

って、そりよりもあの子の仲間だったの!?

「つて、ありや？あんたにそっくりなもう一人はどうしたんだい？」

香帆ちゃんのこと？

「まあ、いないならこっちにも運が回ってきたってことかな。ちょうどいい、あの子がないならチャンスだ。あんたたちのジュエルシード頂くよ！」

それはダメ！ジュエルシードはユーノ君のだから、渡さない！この前からユーノ君と特訓した力見せてあげる！

私は金の魔法少女と、ユーノ君がオオカミの姿に変わった女の人と戦い始めた。

---

私がそこについた時にはなのはと金の魔法少女が戦っているところだった。

「なのはッ！」

「え、香帆ちゃん!？」



私が声をかけると二人は距離をとり、なのはは私に返事をした。金の魔法少女は私をじつと見つめて、警戒している？

覚えてないけど、この前の事が関係しているのかな？

「とにかく私も……」

「ううん、香帆ちゃんはユーノ君の方をお願い」

「え？」

なのはは何を言ってるの？ほら、あっちも目をキョトンとさせてるよ？

「あの子とは私がお話したいんだ。だから一人でやらなきゃダメなの」

「なのは……わかった、気をつけて」

なのははこうなったら頑固だから、それに従ってユーノの方に駆け出す。

「私は高町なのは、あなたの名前教えて？」

「……フェイト、フェイト・テストロッサ」

「じゃあ、フェイトちゃんだね。お話し聞かせてもらうの！」

後ろからこんな話が聞こえた。

なるほど、金の魔法少女はフェイトって言うんだ。覚えておこうつと。

【ブラッドアクション】

高速移動でユーノとオオカミ？が戦ってるらしい所へ行く。

後から聞いたけど、ユーノによるとあのオオカミはフェイトの使い魔らしい。魔力で造り出したパートナー、もしくははペットみたいな感じかな？

そういえば、あれ使ってみようかな？

取り出した『コブラフルボトル』をライフルモードのブラッドに装填。

【コブラー！】

この世界のデバイスであって『夢』でみた『トランスチームガン』そのものじゃない

はずだけど反応してくれた。スロットはあったから可能性があるとは思ってたけど……。

ユーノとオオカミが魔法での戦闘（専らユーノが防御魔法で防いでいるだけ）をしているのが見えたから、二人の真ん中辺りに狙いをつけて放つ。

「スチームショット！コブラー！」

蛇型のエネルギー弾が左右に蛇行しながらも目標地点に着弾する。姿を出す前にフルボトルはしまっておく。

「ッ!?なんだいつ!?」

「ユーノ！大丈夫?」

「香帆!?体は大丈夫なの!?!」

「うん!今のところはね」

ブラッドをライフルモードから拳銃と小剣に分離させ両手に持ってユーノの前に立つ。

「ふん、あんたも来たのかい」

「えつと……どちら様？」

あつちは私の事を知ってるみたいだけど、私はあつちの事は知らない。だけど、どつかで聞いたことある声なんだけど……。

そう言うくとユーノはズツコケ、あつちは少し怒った。

「えーと、香帆。彼女は……」

「夕方にも会ったし、この前の事を忘れたとは言わせないよー！」

そう言って、オオカミは夕方のお姉さんの姿（十ケモミミ）に変化した。

この前つてフェイトとなのはが初めて会った時の事かな？

「あつ……」

「あの子の為に、勝たせてもらうよー！」

素早い動きで近づいてきて殴りかかってくる。

咄嗟にブラッドをクロスさせて防ぐけど、力強いその一撃に拳銃の方が吹き飛ばされた。

更に続けて殴ってくるが、それはユーノが展開した防御魔法に阻まれる。

「アイススチーム！」

そこを私が冷気を纏わせた小剣で斬りかかる。

だけどそれは野生の勘なのか、普通に対応出来たのか、即座に後退することで避けられる。

そして近接戦が始まる。相手の拳と私の小剣、その押収が続く。

何回かは相手に当たるけど、剣を振るより相手の拳が私に当たる方が早く、バリアジャケツト越しとはいえかなりの痛みが襲ってくる。

ユーノもバインドで相手を止めようとするけど、相手が私に近くて中々使えてないし、使っても避けられたり壊されたりしてあんまり役にたっていない。

「……………あんた、手を抜いてるのかい？」

「……………へ？」

相手から距離をとったあと、唐突にそう言われ私は困惑した。

「この前と比べて圧倒的に弱すぎる。アタシを舐めてるのかい？」

いや、そんなことを言われても……。覚えてないし、今ですら割りと本気なのだけど。病み上がりだからってもあるんだけど……。

「……………まあ、いいさ。その慢心、後悔するんだね！」

そうして戦闘が再開されようとした時、

「アルフ」

「ツ！フェイト！終わったのかい？」

「うん、追加でジュエルシードも手に入れたし帰るよ」

フェイトがこちらに来た。口にした内容からなのはフェイトに負けたみたい。ジュエルシールドもとられたと。

帰ると言つて魔方阵を展開した事からあれは転移魔法かな？

「あ、そうだ。私は高町香帆、なのはの双子の妹だよ。

またね、フェイト……とアルフさん？」

なのはも自己紹介してたし、私も一応しておく。たぶんフェイトの言つたアルフつてのがあのオオカミお姉さんの名前だと思う。

二人は何も反応せずにそのまま消えて行った。

とりあえず、私たちはなのはと合流して旅館に戻った。大人みんなは宴会していたお陰で抜け出したのはバレなかったみたい。

体調が万全になったら特訓しないと。なのはとユーノは毎朝やつてるみたいだし、私も入れてもらおうかな？

# 1—9 特訓と……？

「それッ！」

パコンツ、と空き缶が宙を舞う。落ちてきた空き缶に再び狙いをつけて引き金を引く。

「もう一回！」

それを繰り返す事、数十回。衝撃でかなりボロボロになってきた空き缶を、最後はエレキスチームを纏わせた小<sup>スチームブレード</sup>剣で切り裂く。

今、私はなのはと一緒に早起きして近くの公園でユーノに結界を張ってもらって特訓をしている。

やってる内容はなのはとほとんど同じ。ただし、なのはの目的はシューターの制御、私は射撃の命中率の向上。ブラッドでは残念ながら誘導弾を放つことが出来ない（フル



ボトルを利用した攻撃はたぶん別。タカフルボトルとかあったら……) からこうして練習している。接近戦は……お兄ちゃんやお父さんが剣術やつてるし、それとなく教えてもらおうかな？ 適当に理由つけて。

そして訓練もほどほどにして学校に行くと、アリサとなのはがケンカした。

まあ、その原因はほぼ全てなのは……というか、私たちにある。私が快復してからというものの、なのははジュエルシードの回収と特訓にせいを入れていて、アリサやすずかたちとは全然遊ばなくなっていた。それで付き合いの悪くなってきていたなのはに對してアリサがキレた。

「はあ……」

当然魔法の事は話せないし(成り行きとはいえ、はやてに話した私が言えた事じゃないけど) 適当に誤魔化した結果、更にアリサの怒りが爆発。お陰でなのはが意気消沈している。

「なのは……大丈夫？」

「うん……はあ……」

あ、ダメだこれ。

しばらくが経って、ジュエルシードの暴走体と私たちは対峙した。だけど、それはすぐに封印が完了した。

今、なのははフェイトと、私はアルフさんとジュエルシードを巡って戦いが始まろうとしている。

「あんたにフェイトの邪魔はさせないよ！」

「それはこっちのセリフ！なのはの邪魔はさせない！」

「えーと、二人とも……戦う必要あるの？」

思いつきり戦う気満々だったところにユーノの冷静なツツコミが入って、少し考える。

えーと、私の目的はなのはとフェイトの戦いを邪魔させないことで、アルフさんも同じ……あれ？戦う必要ない？

それにアルフさんも気づいたみたいで、そのままにらみ合いになった。

「余計なことはするんじゃないよ。したらそのイタチがアタシの晩御飯になるかね」

「だからこつちのセリフだって。ユーノはあげないよ、高町家のペットなんだから」

「食べようとしなくて!?ボクはイタチじゃなくてフェレット……あ、いや人間だよ!食料でもペットでもないよ!」

「……え?」

「なに、その反応!?そつちの使い魔はともかく香帆たちには言わなかったっけ!」

「聞いてないよ?てつきり喋るフェレット族のユーノだと思ってた」

「スクライア族のユーノだよ!喋るフェレット族って何!」

「ユーノのことだけど?」

何を馬鹿なことをユーノは言ってるのかな?喋るフェレットなんて珍生物はユーノ以外にいないだろうに。

「だからボクは人間だって！……今はこんな姿だけど、正真正銘の人間だから」  
「……香帆、だっけ？そっちの使い魔の妄想がスゴいんだけど？」  
「どうやら疲れてるみたい……帰ったら休ませないとね」

とりあえずユーノを休ませることが決まった。そしてアルフさんもすっかり毒気が抜けて、今は戦う気が無くなったみたい。

だけど観戦ムードになって、なのはとフェイトの戦いを見ようとしたその時。

閃光と共に激しい衝撃が周囲を吹き荒れる。その発生源は封印したはずのジュエルシード。暴走してるのか、魔力が溢れている。

至近距離でこの魔力を受けたのか、なのはとフェイトのデバイスは壊れてとてもじゃないけど封印魔法を使えるようには見えない。

そんな中、フェイトがジュエルシードに近づく。吹き荒れる魔力の中を、ケガするこ  
とを気にせずに。

「フェイト！危ないよー！」

「止めないで、アルフ。私はやらなきや……ジュエルシードを持って帰らなきやならならいんだ……」

どうしたらいいの？ 私は封印魔法使えないし、使えるユーノは軽すぎて最初の衝撃波で飛ばされてつたし、なのはやフェイトのデバイスは破損。なんとかしてジュエルシードの暴走を止めないと……『夢』でみたロックフルボトルなんてあれば可能性が、つて『夢』の話しても意味ないし………ん？フルボトル？

……やるしかないよね。ブラッドは万全だから保護も大丈夫だと思う。問題はこの謎の体質(?)がバレることとジュエルシードがジュエルシードじゃなくなることで、仕方ない………よね。

「ブラッド、お願い。私を手伝って！」

ブラッドアクションを起動し、フェイトを追い抜いてジュエルシードの所へ向かう。後ろからなのはの驚いた声が聞こえるけど無視。そのままジュエルシードを右手で握りしめる。その瞬間からジュエルシードは先ほどより激しく光を出す。かわりに吹き出す魔力は減っていつている。

「お願い、止まって。止まって、止まれえ！」

光が収まると同時に魔力の放出もなくなる。手の中には確かにボトルが。絵柄は隠れて見えないけど、フルボトル化は成功したみたい。

それに安心して足から力が抜けてその場に座り込む。なのはとユーノがこっちに駆けってくるのがわかる。

フェイトとアルフさんはそのジュエルシードは預ける！って言って言って撤退していった。あれ、もしかして気づかれてない？それならそれでいいんだけど……。

「香帆！」

「香帆ちゃん！」

「なのは、ユーノ」

「素手でジュエルシードの暴走を抑えるなんてなにやってるの!？」

「そうだよ！ケガしてない？」

「うん、大丈夫。ちよつと足に力入らないくらいだから」

「……って、あれ？そういえば香帆って封印できないよね。どうやって止めたの？」

「あー、うん。その……フェイトがジュエルシードに近づくのを見て、手で掴んだら止められないかな？って思ってた」

「馬鹿なの!?!」

「で、そのジュエルシードなんだけど……」

馬鹿って酷いよ……。いやまあ、自殺行為にしか思えなかったけどさ。

「まあ、無事で良かったよ。それでジュエルシードがどうかしたの?」

「うん、その……なんかこうなっちゃった」

いわゆるテヘペロをしながら握ってた手を開いて二人に見せる。そこにあつたのは宝石の様子が描かれた水色のボトル。『夢』の世界だと、ダイヤモンドフルボトルって言われてたもの。

「え、えええええええ  
!!!!???

私たち以外いなくなった場所で、二人の悲鳴が響いた。うん、ほんとどうしよ（汗）

『  
……  
●●●  
のハザードレベル規定値突破を確認。  
システム・  
■  
■  
■  
■  
の使用制限  
を解除します』



## 1—10 禁断の引き金

ユーノとなのはが、ジュエルシードがフルボトルに変わったのを見て驚いた翌日。なのはのレイジングハートの修復も終わって、再びジュエルシードの搜索を再開していた。

え？あのあと、どうなったかって？とりあえずコブラフルボトルは隠し通したよ。ダイヤモンドフルボトルの方はユーノとレイジングハートに見てもらった結果、ジュエルシードとは全くの別物だって結論付けられた上、（私は知ってたけど）ブラッドのスロットに装填して使用出来ると判明したから私が持っている。

今朝、周りの安全を確認した上でユーノやなのは立ち会いの元使ってみたら、ブラッドの銃口を向けた方にダイヤモンド性の盾が現れた。その性能はスゴかった。なのはの砲撃を受け止めることに成功したんだから。次は抜いてみせる！ってなのはが燃えてるんだけど、それはまた別の話。

そして、今。

私たちはジュエルシードの暴走体を前にしていた。駆けつけた時にはフェイトが既

にいて、戦っていたんだけど樹を取り込んだらしいその暴走体はバリアを張っていて攻撃が通らないみたい。まずは封印、と私となのも戦いに参戦する。

まずはブラッドから魔力弾を数発撃つ。当然、それはバリアに阻まれるけど目的は牽制。根っこをこちらに伸ばして攻撃してくるけど、それは小剣で切り裂いたりアイスチームで凍らせたりして処理する。

そうしている間になのはとフェイトが上空から同時に砲撃を暴走体へと放った。後から聞いた話だけど、偶然攻撃が重なったみたい。それでバリアを貫いて無事封印。

だけど、これで終わりじゃない。これからなのはやフェイトにとつては本番。今封印したジュエルシードをどっちが手にするかの勝負が始まる。昨日と同じく、私、ユーノ、アルフさんが二人から離れる。

でも、なんだろ。さつきから何かが起きそうな予感がガンガンしてる。昨日のようにジュエルシードが再暴走つてならないように万が一に備えて用意はしておく。……あれ？『システム・ハザード』？ブラッドにこんな機能あったっけ？ハザードって聞くと思い浮かぶのは『夢』に出てきた『ハザードトリガー』だけど、関係あるのかな？

禁断のアイテム『ハザードトリガー』。使うとハザードレベルを上昇させ続け、脳に刺激を与えることで強力な力を手に入れるけど、時間経過で理性を失い破壊衝動に飲まれる危険性がある道具。

今までのブラッドやフルボトルの事から、たぶん元になってるのはこれだと考えられるんだけど……。『夢』だとトランスチームシステムとハザードトリガーって関係無いんだけど、なんでなのかな？

「フェイトちゃん、私はただあなたとお話したいだけ。だから、私が勝ったらお話を聞かせてもらうよ！」

なのははそう言つて、フェイトは無言のまま、お互い動き出して戦闘が……。誰か、来る？

二人のちょうど中間地点に現れる魔法陣。転移魔法!? たぶん、二人はそれに気づいていない。誰だか知らないけど、邪魔はさせない!

急いで走り出す。でももう魔法陣の輝きが強くなり始めた、今にも出てきそう。ブラッドアクションを使つてもたぶん間に合わない。だったらどうする? 諦める? ううん、それはダメ。なのはたちの邪魔はさせないって決めたから。だから……。

「ブラッド、『ハザード』オン」

『ハザードオン!』

その瞬間、頭に何かが流れ込んでくる感覚がはじめる。それによって頭痛が起きるけど、我慢する。私の体を赤黒いオーラみたいなのが覆ってるのは気のせいじゃなさそう。でも、これなら間に合うはず！

【ブラッドアクション】

そして、ギリギリ間に合った私は転移してきた奴に全力の飛び蹴りをかましてやった。

私とフェイトちゃんがお互いのデバイスを突きだした時、急に香帆ちゃんが間に割り込んで来た。

「そこまぐホオ!?!」

その直後、誰か来たのか香帆ちゃんの蹴りがお腹に突き刺さってその勢いのまま二人して通り去った。

「え？」

「なのは！こつちはいいからやりたいことやって！」

「う、うん……」

そうは言われても、私もフェイトちゃんも現状がちよつと理解出来なくて困惑してる  
らだけだ。

「まずい、時空管理局だ！逃げるよ！」

すると、香帆ちゃんに蹴られた人を見たアルフさんが何かに気づいて叫んだ。それを  
聞いてフェイトちゃんはアルフさんの方へ行って、一緒に逃げ出した。

「ッ！待てッ！」

「二人の喧嘩の邪魔はさせないよ！」

逃げるフェイトちゃんたちを魔法で攻撃する男の子。だけど、それは香帆ちゃんが全て撃ち落とした。

「仕方ない、抵抗すると言うなら実力行使させてもらおう」

男の子と香帆ちゃんが戦い始めた時、ユーノ君が来て声をかけてきた。

「なのは、たぶん彼は時空管理局の人だ、敵じゃない。香帆を止めないで！このままだと香帆が捕まっちゃうよ！」

「え!?それはダメ!香帆ちゃん止まって!」

「香帆!止まって!」

でも香帆ちゃんには聞こえてないのか、より戦いが激しくなっていく。

『ブレイズキャノン!』

『フルボトル!』

『スチームアタック！フルボトル！』

男の子が勝負を決めようとしたのか砲撃を放った。でもそれは香帆ちゃんを作り出したダイヤモンドの盾に受け止められる。盾を消した香帆ちゃんが近づこうとした時、香帆ちゃんの手足を光るリングが捕らえた。

「まさか砲撃を受け止められるとは思わなかった。念のためバインドの用意をしていて助かったよ」

「このツ！とれな……グツ!？」

「悪いが大人しくしていてくれ。話は後で聞こう」

「……げて」

「だから話は後で聞くと……」

「全員、逃げて！」

「え？」

香帆ちゃん?どうしたの、急に……。

次の瞬間、香帆ちゃんの首がカクンと垂れたと思いきや、リングをぶち破った。

「な、まだ余力を残していたというのか!？」

『オーバーフロー!』

「ガッ!？」

目に見えないスピードで移動した香帆ちゃんが男の子の首を掴んで持ち上げる。男の子は息が出来なくなって苦しんでる。

「香帆ちゃーん!やめてーん!」

それが通じたのか、一瞬香帆ちゃんの動きが止まる。そこに複数の魔力弾が当たり男の子が香帆ちゃんから離れる。

周りを見ると、いつの間にか男の子と同じような服を着た人たちが香帆ちゃんを囲んでいた。



「クロノ執務官！大丈夫ですか!？」

「ああ、助かった」

「彼女は……」

「話は無力化してからだ。彼女は明らかに危険だ」

香帆ちゃん……。もしかして初めてフェイトちゃんと会った時みたい？なんか、似てる感じがする。

「なのは……」

「ユーノ君、香帆ちゃんを止めるよ」

「わかった。無茶はしないでね」

「わかってる」

私は香帆ちゃんのお姉ちゃんなんだから、私がなんとかしてあげないと。怪しいのは香帆ちゃんのデバイス。そこから時々煙みたいのが出てる。

管理局の人？たちはみんなで香帆ちゃんに向けて射撃魔法を放つ。でもそれは全て香帆ちゃんが出したダイヤモンドの盾で阻まれる。

「レイジングハート、いくよ」

『OK』

「香帆ちゃん……少し、頭冷やそうか？」

【「デイベインバスター」

盾が守ってるのは香帆ちゃんの前だけ。ちやうど私がいるのは香帆ちゃんの後ろ。出来るだけ強く、香帆ちゃんを助ける為に、魔力を込めて撃つ。

前からの攻撃だけを防ぐことに集中していたのか、香帆ちゃんはそこから動かなくて私のデイベインバスターに飲み込まれた。

後にはデバイスを手放して倒れた香帆ちゃんと私、何故か震えているユーノ君に管理局？の人たちが。

……あれ？

1—1—1 宇宙戦艦ヤ○ト?……え、違う!?アースラ?

目が覚めたら両手を手錠やらなんやらで嚴重に拘束されて、ベッドの上だった。拘束されているのは手だけだから起き上がってなんとか立つことは出来たけど。

……え?ちよ、ちよつと落ち着こう。まずは深呼吸。ヒツヒフー、ヒツヒフー……つてこれ違う!スー……ハー……。よし、まずは周囲の確認。

ここはどこかの牢屋とかではなく普通の部屋らしい。アニメで見るとような近未来的な雰囲気はそこはかとなくしてるけど。服もバリアジャケット展開前と同じ。ただ、やはりというかブラッドはないみたい。

んー……。これって誘拐されちゃった感じ?そうだ、それならなのはとユーノ、フエイトたちは!?

そんなことを考えていると扉が開いて見覚えのある男の子が入ってきた。……ああ、なのはとフエイトの喧嘩を邪魔しようとしてきた男の子だ。転移してくるのが男の子だと最初からわかってたら間違いなく○○を蹴りあげてたのに……。

「はあ……変なことを考えるのは止めてくれ。悪寒がする」

「誘拐犯の言葉なんて聞きませーんよだ」

「誘拐……違うんだが、今はいい。それよりついてくるんだ、君の姉と友人が待っている」

「!なのはと……友人ってフェイト?あれ、でもフェイトって逃げてなかったっけ?んー、暴走したからかあんまり覚えてないや。」

「まあ、抵抗なんて出来やしないからとりあえずついていく。なのはは無事なんだろうか……。」

「と、まあ男の子について行って訪れた部屋には艦長室というプレートが。艦ってことは……、どこかの船の中?」

「艦長。クロノ・ハラオウンです。彼女が目覚めたので連れてきました」

「わかったわ。二人とも入ってちょうだい」

中に入ると……異境?これまで見てきた廊下や部屋の雰囲気とは180度、いやそれ以上に別世界だった。だって……。

「なんで和室!？」

「日本の文化に惚れ込んだんじゃって♪」

ええ……(困惑)

本気でどう対応したらいいか、わからないんだけど……。

「香帆ちゃん!」

「香帆!」

「なのは! ユーノ……?」

横から聞き慣れた声でしたのでそつちを向くと、なのはと……どこかの民族服に身を包んだ男の子が。あれ、ユーノの声がしたんだけど、何処に?

「……まさか、ユーノ?」

「え、うん。そうだけど……」

「人間になれたんだね、おめでとう」

「いや、だから元から人間だって言ってるよね!? そんな笑顔で言われるとなんか心に来

るんだけど!」

まあ、冗談は置いといて。ユーノが人間って本当だったんだ……。

「あの、香帆ちゃん……」

「ん、そういえばなのは大丈夫だった!?何もされてない!?」

「君は僕たちをどう思っているんだ……」

「誘拐グループとその一味」

「即答しないでくれ!あと、それは完全に否定させてもらおう!」

「ふふふ……クロノ、彼女の拘束を外してあげて」

「母さ……艦長!」

「大丈夫よ。貴方と漫才出来るくらいだし、なのはちゃんたちから良い子だつて聞いているから。責任は私取るわ」

「わかりました。あと、漫才などしていません」

そんなこんなで腕の拘束が全て解かれ、固まりかけた腕をほぐしながら話を聞くことに。

艦長と呼ばれた女性はリンディ・ハラオウン提督。時空管理局という組織のそこその地位にいるそう。その時空管理局は次元世界での犯罪等を取り締まる、いわば警察みたいな権限を持つらしい。で、ガッツリと公務執行妨害に私の行動が引つ掛かったみたいで……。いや、はい。暴走してたとはいえ、すみませんでした。

無言で土下座して謝意を示す。

今回は管理局の事を全く知らなかった事、罪もかなり軽かった事、なのはとユーノの取り成しがあつた事と色々と重なり、無罪放免となつた。

一応私のデバイスのブラッドも返ってきたけど、システム・ハザードは余程の危機以外では使用しないように、と言われた。見境なく暴れるようではすぐに管理局のお世話になるだろうからの忠告らしい。

そして肝心のジュエルシードの件。

結果だけ言えば、私たちと管理局で協力してやることになった。これまでに回収したジュエルシードは全て管理局が保有。これには元ジュエルシードのダイヤモンドフルボトルも含まれる。え、コブラフルボトル？ブラッド内部に格納していたけどなんかバレなかったからそのまま持ってます。まあ、一つ言わせてもらうならここまです少し長かった。

リンディさんに、管理局が回収に全権を持ちます。と言われて一度帰された翌日。な

のはが、やつぱり手伝う! フェイトちゃんとお話したい! って言い出して、リンデイスンたちと交渉。リンデイスンたちの指示に従うという条件で参加が認められた。……なんなかやけにすんなりいったけど、気のせい? クロノ——私の戦った男の子——は頭を抱えていたし、リンデイスンに誘導でもされた?

まあ、いいこともあった。いや、しんどいけどどちらかと言えばいいことのはず。

「狙いが甘い! よく狙え!」

「ハイッ!」

「もつと足を動かせ! 戦場で止まったら死ぬぞ!」

「ハイッ!」

鬼教官クロノに魔法戦闘の訓練をつけてもらっている。クロノは私たちより二歳くらい年上で執務官という難しい試験を突破することになれる役職についている。その実力は折り紙つきで暴走時の私に負けたというのが信じられないくらい強い。

「よし、これ以上はやめておこう。水分をしっかりとだて休憩するように!」



「……あゝいゝ」

いつか、勝つてみせる……。でも、今は無理、ガクリ。

1—12 いざ!最後のジュエルシード回収へ!……:え?最終決戦も終わった!?

宇宙戦艦……:じゃなかった、次元航行艦アースラというらしいこの船に乗ってジュエルシードの回収作業の手伝いを始めて数日。両親もしばらく学校を休む事を許してくれた……いや、ありがたいけど珍しくわがままを言ったからって軽々しく許可していいものなの!?確かにユーノを家のペットにする事くらいしかわがまま言ったことないけど!

つと、まあそれはどうでも良くて。

「行くよ、香帆ちゃん!」

「え、えつと……う、うん!」

なのはに引つ張られ、艦橋から出る。あー、もう。どうにでもなれ!

残るジュエルシードが7個（内一つ、私が持つてるけどバレてない）になった時のこと。後回しにしていた搜索エリア、海で強力な魔力反応をアースラが感知した。モニターに映像を出すと、フェイトが雷を落として（儀式魔法という大がかりなものらしい）海に眠っていたジュエルシード6個全てを強制起動させた所だった。それを見たのは封印しに行くと言ったけど、クロノやリンデイさんに止められた。曰く、フェイトが疲弊した所をジュエルシードとフェイトの総取りにした方がいい、とのこと。まあ、当然ながらなのはがそれに反発。リンデイさんとかを完全無視して、ユーノと私を引張って出撃しようとしている。

せつかく激務で疲れてるだろうアースラのみんなにコーヒー入れてる途中だったのに……。なのはにそう愚痴ると。

「嫌な予感したから香帆ちゃんも連れ出して正解だったね」

「ナイスだよ、なのは。お陰でアースラのみんなの命は守られたよ」

その言い方だと私のコーヒーが劇物みたいじゃん!? 解せぬ。

「転移装置起動するよ!二人とも用意はいい?」

「うん!行くよ、レイジングハート!」

「え、あ、ブラッド!」

セットアップすると同時に装置が稼働。荒れ狂う海上に転移した。

「フェイトちゃん!」

「あいつら……また!」

なのはが6つの暴走体と戦ってるフェイトに声をかけるとアルフさんが反応して敵意を向けながらこつちに来た。ユーノがバリアを張ってアルフさんの攻撃を受け止め、私がアルフさんを、なのはがフェイトを説得する。

「私たちは戦いに来たんじゃない!」

「フェイトちゃんを手伝いに来たの!」

フェイトに近づいたなのはが、魔力を分け与える事で一応信じてくれたのか敵意を抑

えてくれる。

「それで、何か作戦はあるのかい?」

「私とユーノとアルフさんが暴走体を抑えつつ、なのはとフェイトのバスターで一網打尽。これしかないでしょ」

「……わかった」

「フェイトが従うってならアタシもそれでいいよ」

「よし、じゃあユーノとアルフさん、援護お願いね」

一声かけて、私は暴走体に向けて突っ込んでいく。

「香帆!?!」

「あんた何を!?!」

私の最高速度はフェイトと同じくらい(ただし、長時間は無理)。この速度をもつてすれば、囲くくらい出来る!なのはとフェイトの準備が完了するまで時間を稼いでみせる!六つの竜巻に適当に魔力弾を放ち、注意をこちらに向けさせながらブラッドアクシヨ

ンで加速して攻撃を回避していく。ユーノとアルフさんはバインドで竜巻の動きを止めたり、私に直撃しそうなった攻撃をシールドを展開して防いでくれる。

そして、その時は来た。

「デイバイン………」

「サンダー………」

二人の魔力が集まっていき大きくなる。それを見た私は急いで上に向かって飛ぶ。

「バスター!」

「レイジ!」

なんとか距離を取れて、それと同時に二つの砲撃が放たれた。それにより暴走体も沈黙。封印も成功したみたい。

「二人ともお疲れ〜」

そう声をかけながら下に見える二人の元へ向かったその時。私の意識は途切れた。最後に聞こえたのは雷の音だった。

目が覚めると、アースラのベッドの上だった。今度は拘束じゃなくて、包帯を体の至るところに巻かれている。少し体が痛むけど、動けないほどじゃないから起き上がって、アースラのブリッジを指す。

ブリッジに入ると……。

『受けてみて。これが、私の全力全開!スターライト……ブレイカー!!!』

モニターに、バインドで拘束されたフェイトに向けてなのはが超弩級の砲撃を放っている所が映っていた。……っていうか、全力全開っていうより、全力全壊?

「なのはってこんな鬼畜キャラだっけ……」

「えっ、香帆ちゃん!?目が覚めたの!?!」

アースラクルーの一人、エイミイさんが呟いた私の声に反応して声をかけてくる。言葉返そうとするけど、その前に突然アラートが鳴り響いた。同時にアースラにも衝撃が走る。私も震動により転けてしまう。

痛む体にこれは効く……。

「これは……艦長!」

「防御を最優先に!その次に発射元の特定を!」

「了解!」



え、何これ、アースラが攻撃された!? 映像も途切れてなのはたちの様子もわからない(というか、どういう状況かすらわかってない。なんでなのはとフェイトが戦ってたのかとか)。

しばらくすると震動も止まり、アラートも消えた。一体、何が……？

「場所特定しました!」

「武装隊の出撃を!」

どうやら攻撃してきた場所を把握したみたいで、そこに人を送り込んだそう。

「リンディさん!」

なのは達が戻ってきた。どうやらあつちは無事だったみたい。あ、フェイトもいる。手錠されてるけど。

「おかえり、なのは」

「え、香帆ちゃん!?起きたの!」

「う、うん……もしかして私、長い間寝てた?」

「……まあ2日は寝てたよ」

ウソーン!?!え、ほんとに私に何があったの!?

「えっと、香帆ちゃんはその……雷に撃たれて、墜落して……」

「あ、うん。わかった、理解した……」

なんか、恥ずかしいかも……。つて、あれ?普通の雷ならバリアジャケットが守ってくれるはずじゃ?

『管理局だ!投降しろ、プレシア・テストアロッサ!』

いつの間にか、突入した武装隊の人たちが攻撃してきた人のもとに着いたみたい。ん?プレシア・テストアロッサ?

「ねえ、なのは。あのテスタロッサって人ってもしかして……」

「うん、フェイトちゃんのお母さんだつて。いくらお母さんでもフェイトちゃんを攻撃するなんて許せない!」

「……あの人そんなことしたの」

「え、つてそうか。香帆ちゃん寝てたから何も知らないんだっけ」

後で聞かせて、とだけ言うともモニターに視線を戻す。そこにはボロボロにやられた武装隊の人たちと、カプセルに入ったフェイトと瓜二つの人が映っていた。

そして、リンデイさんとプレシアさんの話が始まり、途中でフェイトの話に。その時、

『あの人形を娘だと思つた事なんてないわ。聞いていて? フェイト、貴女の事よ』  
「え?」

『私の娘は、このアリシア一人だけよ! 貴女はアリシアの遺伝子から造つた、記憶を複写しただけの失敗作の人形よ』

「プロジェクト・フェイト……」

『あら、よく知ってるじゃない』

エイミイさんが眩き、それを拾ったのかプレシアさんが話し出す。簡単にいうと、クローンを造り出す計画の事らしい。クローンって聞いて、『夢』だとクローンヘルブロスやクローンスマッシュなんて造られてたな……なんて考えて、人間造り出す時点でプレシアさんの方が技術力は難波より上かな?

『でも、もうダメね。回収出来たジュエルシードも僅か。確率は低いけど、これで私たちはアルハザードを目指す!』

「なッ!? 貴女は何を言ってるの!？」

『止めたいのならせいぜい頑張ってみなさい』

そう言うのと映像が切れた。同時にジュエルシードを強制起動させたのか、再び震動がアースラを襲う。

「クロノ執務官、出撃を命じます。プレシア・テスタロッタの確保を。なのはさん……それと病み上がりですいませんが、香帆さん。貴女たちも手伝ってくれませんか？」

「わかりました! まかせてください!」

即答!?……ま、なのはがやるのなら私も手伝おうか。早く終わらせて近々あるはやての誕生日の為のケーキとか作らないといけないしね。

「はいー!」

「それと香帆さんには、システム・ハザードの使用を許可します。なりふり構っていられる状況ではありませんので。出来るなら使ってほしくはないですけどね」

「……わかりました」

その言葉を最後に、クロノとなのはとユーノと私の四人は出撃した。

# 1-13 やっぱりハザードは止まらない？

「なるほど……フェイトがジュエルシードを集めていたのはプレシアさんの命令。ユーノの乗っていた輸送船を襲撃したのもプレシアさん。私に雷を落としたのもプレシアさん……つまり全部プレシアさんのせいなんだね！」

プレシアさんのいる時の庭園という場所に着き、そこに配置されているロボットを倒しながらなのはたちから話を聞き、状況を理解した。まず最初の目的は魔力炉を停止させてこのロボット等を止めることらしい。

「……まあ、おおざっぱ過ぎるがだいたい合っているな」

よし、クロノのお墨付きはもらった。この調子で最奥まで……って何、この穴。

「あ、香帆、気をつけて。その穴は虚数空間に繋がっていて、落ちたら魔法が使えなくて二度と帰ってこれないから」

「え!?わ、わかった、気を付けるよ」

「他の所にもあるかもしれない。注意しよう」

そうして進むこと、しばらく。もうすぐで魔力炉だという所で大型のロボットが道を阻んだ。

「……やるしか、ないよね」

「その通りだ。押し通らせてもらおう!」

「邪魔を、しないで!」

私の銃撃が、クロノのステインガーが、なのはのバスターがロボットを襲う。でも、それを受けても平然と立っていた。

「効いてない!?!」

「いや、少し傷がついているからそれはない。だが……」

「倒すのに時間かかりそうだね……」

どうしようか、そう悩んだ時。

「あんたたち、伏せなあ！」

「ハアアアアア!!!」

アルフさんの叫び声が聞こえたと同時に物凄いスピードでフェイトが突っ込んできてロボットを切りつけた。その勢いでロボットはかなり後退。魔力炉への道は開けた。

「フェイトちゃん！」

「私も手伝います」

「……わかった。なのは、それにフェイト。君たちは魔力炉に向かって止めてきてもらえるか。元より封印魔法の使える君たちにしか出来ないことだ」

「わかりました！」

「はい」

となると、私はここでクロノと一緒にロボットをぶつ倒す役目だね。速くプレシアさんの所にいかないと。



「しかし、彼女が来るとは思わなかったな」

「発破かけたかいたがあつたみたいだね」

「何を言つたんだ？」

んーとね……………

出撃前の最終準備の時間。私はフェイトに少し話しかけていた。

「フェイト、貴女が立ち上がらないのは勝手だよ。でも、そうなった場合、誰がプレシアさんと戦うと思う？……………なのはだよ。なのはは底無しのお節介焼きで、敵だった人でさえ助けようとする。フェイトがその一つの例だよ。だけど、今のなのはの実力じゃプレシアさんには勝てない。」

だからフェイトが立ち上がるしかないんだ！貴女が力を貸してくれたら、勝てるんだ

！」

「私……が？」

「そうだよ。でも、今すぐじゃ無くていい。落ち着いてからでいいから」

「無理……無理だよ……私には」

「プレシアさんの為に動いてた貴女はどこに行つたの！あの気持ちは嘘だったの！違うでしょー！」

「でも……」

「フェイト、貴女は一人じゃない。彼らはいつも一緒にいてくれるじゃない。人形なんかじゃない、フェイト自身を見てくれていた彼らが」

『夢』での私が言っていた「万丈だ」に色々と私なりに似せて話したけど、どこまで通じたやら……。

「と、まあこんな感じに……ある程度適当に言つたのは認めるよ。なのはが戦うといっ

た所とか」

「だが、お陰で戦力が増えたことには変わりない」

「クロノはプレシアさんを捕まえるんでしょ？」

「もちろん、そのつもりだが？」

「だったら、ここは私に任せて先に行つてよ」

ブラッドにハザードの用意をさせつつ、クロノにそう提案する。時間もあまりないみたいだし、これが一番だと思う。……私の暴走の可能性を除いて。

「いけるのか」

「私を誰だと思ってるの？ 私は星光砕く一撃スターライトブレイカーを放つなのはの妹だよ。いける、いけないの話じゃなくて、やるんだから」

「……わかった。死ぬなよ」

不吉なことと言わないでくれるかな!? 心配してくれているのはわかるけど。そしてブラッドに命じて、こっそり拝借してきたあれを出してもらおう。

「な、それは!？」

「説教でもなんでも後で受けるから今は見逃して、ねっ!」

持ち出したジュエルシードを手に取り、ボトルへと変化させる。今、欲しいのは力。あのロボットを倒せる力を!

その願いが通じたのか、ゴリラの描かれた茶色のフルボトルに変化した。

『フルボトル!』

ってそーういや、ゴリラフルボトルってトランスチームで使ったらどうなるんだろ?まさか、ゴリラ(リアル)にならないよね!?

『スチームアタック!フルボトル!』

銃口から吹き出た煙が私に吸収されていく。すると、力が体の奥底から湧き出てくる。ブラッドを腰に収め、そのままロボットへと殴りかかる。その威力でわずかに下がるけど、このままじゃ時間がかかってしまう。なら!

「ブラッド！」

『ハザードオン！』

ブラッドから生成される煙化した強化剤を纏い、ゴリラの力で強化された体をさらに強化する。

「吹き飛んじやええええ!!！」

激しい音と共にロボットの装甲が一部破壊され、道が開いた。それを見たクロノは全力で駆け抜けていった。後に残るはいつ暴走してもおかしくない私と、一部が壊れたロボット。私が暴走するのが先か、ロボットが壊れるのが先か、いざ勝負！

このロボットは大きいだけあって、動きはトロい。ただ、振り下ろされた一撃はそれだけで軽く地面を砕いている。私は自前のスピードで攻撃を避けつつ、一撃を確実に入れていく。一撃が入る度に凹み、ボロボロになってくロボット。それに比例して頭痛も起きて、だんだんと強くなってくる。

とるべき手は解除して逃げ……なんだろうけど、任せてと言った手前、逃げたくはな

い。だからこうする。

『マックスハザードオン！』

強化剤を追加し無理矢理私の能力を引き上げる。その代償は確実な暴走。でも、やりようによっては暴走前に解除も可能なはず……！

「マスト………ダアアアアイ!!!」

確か、なんかのアニメでトドメさすときにこんな声あげてた気がする。確か……シンフオニア？みたいな名前だったよね。フェイトによく似た声の防人さんが出てくるアニメ。それはそれとして、この一撃を受けたロボットはバラバラに砕け散った。後はハザードを解除するだけ……。

『オーバーフロー！』

あつ。

「私が貴女の娘だからじゃない。貴女が私の母さんだから！」

「……………ツ！そう、でももう遅いわ」

プレシアが虚数空間へとその身を落とそうとしたとき、壁が轟音と共に吹き飛び漆黒の煙に飲まれた香帆が現れた。

「暴走……………したのか」

「……………」

クロノとフェイトが仕方なく応戦しようとしたとき、雷が香帆を襲う。その一撃で香帆は倒れ、暴走が解除される。誰がやったのか、わかった二人はすぐに振り向く。

「ただの気まぐれよ。それじゃあね」

「母さん！」

プレシアは口元から血をこぼしながらも魔法を放ち、そのまま虚数空間へと落ちていった。フェイトとクロノはなのはと合流し、香帆を抱えて崩れる時の庭園を脱出した。

「さて、香帆さん？何が言いたいかはわかってますよね？」

「ヒヤイツ！」

「うふふ……さあ、覚悟しなさい！」

香帆ちゃんは目が覚めてすぐにリンデイさんに説教されていた。勝手にジュエルシードを持ち出してボトル化させたみたい。でも、これでジュエルシードの騒動は終わ



りかな？短いようで長かったような……。

「いや、なのはまだ最後の一個見つかってないからね？」

「そういえばそうだった!?どこに落ちたんだろう？」

最後のジュエルシードの探索は管理局の人たちが責任を持ってやるということで、私たちは日常に戻った。

数日後、フェイトちゃんたちを一旦管理局の方に連れていかないといけないらしく、アースラはしばらく地球を離れることになるそう。何人かは残してジュエルシードの探索するみたいだけど。

それで、フェイトちゃんが私と香帆ちゃんと話したいみたいで朝の公園に呼び出された。

「フェイトちゃん！」

「やつほ、フェイト」

い。フエイトちゃんの話は私たちと友達になりたいたいってこと。だけど、方法がわからな

「それなら簡単だよ。名前を呼んで？」

「名前を……」

「うん！」

「なのは、香帆」

「フエイトちゃん」

「フエイト」

「なのは！香帆！」

そして私たちはなんか可笑しくなって笑った。そのあとリボンを交換して別れた。私は右のリボンを、香帆ちゃんは左のリボンを。

………とところで香帆ちゃん？その後ろに隠した物だそうか？

「え？いやだなあ、アースラの人たちにコーヒーを……」

そこまで聞いて私はレイジングハートを起動した。

「……なのは？いや、なのはお姉ちゃん？なんで私にレイジングハートを向けてるんでしょうか？」

「香帆ちゃん。少し、頭冷やそうか？」

あの殺人コーヒーを飲ませる訳にはいかないの！デイバイン……

「バスター！」

「なんでええええ  
!!!??？」

ふう、悪は滅びたの。

2—1 祝え!我がま……親友の誕生日を!そして……

「フンフフーン♪」

とある日の昼過ぎ。私は上機嫌でケーキを作っていた。なぜなら明日ははやての誕生日。そのお祝いを作っている。スポンジケーキは焼き終わっていて、今はクリームを塗っている。ちなみに誕生日パーティーの参加者は私とはやての二人だからケーキは少し小さめ。

「よし!完成!」

置いてあった箱にケーキを保冷剤と一緒に詰める。日を跨いでのパティーを予定しているから夕方に家を出るつもり。泊まりの用意も出来てるし。さあ、楽しみだなあ!

……なんて思ってた時がありました。

「……なんで私は縛られてるでしょうかね？」

私は今、はやての家で変な四人組にバインドで拘束されています。その四人とは桃色の髪の女剣士、赤チビ、ケモミミお兄さん、そして私を拘束したおっとりとしたお姉さんだ。はやては気絶してるし、この四人は私の話を聞いてくれないし、夜中だから眠いし……。グウ……。

「全員正座！」

ハッ!寝てません、寝てませんよ!決してはやての怒声が聞こえたせいで起きた訳じゃないですよ!

とりあえず辺りを見ると、車椅子少女のはやての前で正座して怒られている例の四人が。そこから始まるはやての説教。それはとても長かったからカットさせてもらう。

「あのく、はやてさん?」

「ん?あ、香帆ちゃん、目え覚めたんか。……つてそのままやったな、堪忍な。ほら、シャル」

「はいっ!」

若干涙目になってたシャルと呼ばれたお姉さんが私の拘束を解除する。

「で、はやて。その人たちは?」

「ふふふ。聞いて驚くがいい!私の騎士……らしい!」

いや、らしいって……。

「我らは闇の書の主に使えるヴォルケンリッター。主の親友とは知らず、この度の無礼をお許しください」

「えっと……はい」

「なんかこの闇の書ってやつ封印が今日解けたらしくてな。そこから出てきたみたいなんよ」

「闇の書？」

「シグナム、説明お願い」

「よろしいのですか？」

「構わへん、香帆ちゃんは私の親友や」

「では。闇の書とは……」

で、説明された事をものすごく簡単に纏めると。

・ 魔力を蒐集し、闇の書のページをうめて完成させるとなんでも出来る力が手に入るらしい。

・ 蒐集にはそこそこの痛みが伴う。

・ 闇の書の正当な持ち主を主と呼び、支えるヴォルケンリッターがいる。後はまだ目覚めていないが管制人格と呼ばれる存在も。

へー……なんでも……。はやての足を動かせるようになったり？

「ま、私は蒐集なんてするつもりもさせるつもりもないけどな」

「そうなの？」

「だって痛いんやろ？人様に迷惑かけるのは無しや！」

「ま、そうだよね」

笑いあう私とはやて。ヴォルケンリッターの四人はポカーンとしている。何があつたかわからないけど、とりあえずやることはひとつ！

「香帆ちゃん」

「わかってるよ、はやて」

「服を買いに行くで／よ！」

四人の格好だと凄い目立つしね。あ、でも。

「お金はどうしようっ？」



「それなら心配あらへん。グレーム叔父さんから生活費として大量のお金が振り込まれてるからな。私はこんな要らんって言ってんけど……ここでパーツと使わせてもら  
おか」

へー、はやての叔父さんって凄いお金持ちなんだ。

「それじゃあ行くで！」

「おー！」

---

そして、はやてがヴオルケンリッターという家族を得てから時が経つこと半年。

「なあ香帆。お前は本当にいいのか？」

「もちろん。はやては私の親友だし、助けられる命を見捨てたくはない」

「そうか……なら、もう聞かねえ」

この前、偶然ヴォルケンリッターの四人が話しているのを聞いてしまった。このままではやての命が危ないと。助けるには書を完成させるしかない。だから私は四人に手を貸すことにした。

【Cobra……!】

「蒸血」

【Mist mach……!】

【Co. Cobra……Cobra……Fire!】

《夢》で見たのと同じように、コブラフルボトルをトランスチームガンブに装填して引き金を引く。私の体を白い煙が覆い姿を変える。蛇の怪人、ブラッドスタークへと。何故か身長も変わってるけど、バレにくくなるからありがたい。声は変えられる。ただ、武器は使えない。私にスタークだとは知られたくないから。使えるのは伸縮ニードル『スティングヴァイパー』や麻痺効果を持たせた蹴りくらい。蛇の召喚は切り札の一つ的な感じで置いておきたい。

『あー、あー。よし、行こうか』

「はやてに心配させないようにさっさと終わらせるぞ」

私とヴォルケンリッターが一人、鉄槌の騎士ヴィータは結界に閉じ込めた一人の高魔力保持者——なのは——の下へと向かった。私は基本ヴォルケンリッターのサポートが役目。麻痺毒がかなり使えるのなんの。それで今までも蒐集対象の動きを止めて魔力を貰ってきた。

ごめんね、なのは。私、今回はあなたの敵になる。これは決して正義ではない。はやてを助けたという、私のわがままで！